■研究発表論文

拡充期の東京帝国大学理学部附属日光植物分園におけるロックガーデンの整備について

The rock garden of the Nikko botanical gardens attached to Tokyo Imperial University Faculty of Science in the expansion period

西村　公宏*

Kimihiro NISHIMURA

Abstract : The aim of this study is obtain the character of the rock garden of the Nikko botanical gardens attached to Tokyo Imperial University Faculty of Science in the expansion period. The Nikko botanical gardens moved to Rengeishi in 1911. The new site, was also planted alpine trees, “Tsukiyama style” rock garden was built near the office by Shunsuke Kusano and Naoyoshi Mochizuki in reference to perhaps the British rock garden from 1912 to 1914. And the like that the Taisho Emperor sometimes took a walk in the botanical gardens during the summer months, the landscape gardening in the gardens advanced more and more. In 1927, “Taisho Emperor memorial garden” (about 2,000 tsubos) was made in the hilly place in the middle of the gardens. This garden of the Tsuyoshi Tamura design consisted of a lawn open space, realistic rock garden with many pockets and water garden. And the new rock garden (about 150 tsubos) was made along the Daiya River from 1934 to 1937. In the Nikko botanical gardens, the rock garden was the continued to be a major facility with the alpine atmosphere from 1911 to 1945.

Keywords: *Rock garden, Tokyo Imperial University, Alpine garden, Nikko, Naoyoshi Mochizuki, Tuyoshi Tamura*
キーワード：ロックガーデン，東京帝国大学，高山植物園，日光，望月直義，田村剛

１．はじめに

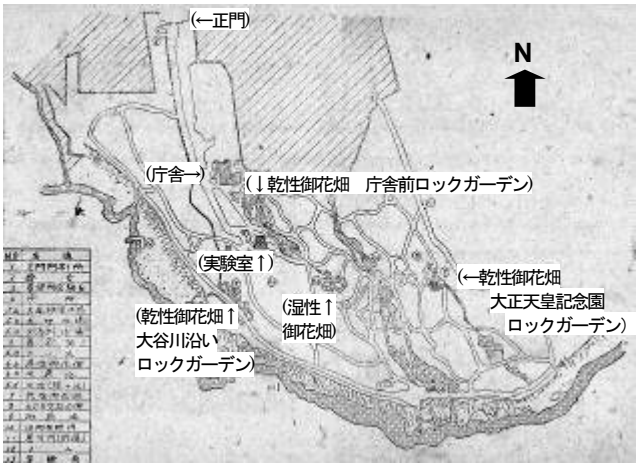
国立大学法人東京大学大学院理学系研究科附属植物園日光分園の前身である東京帝国大学理学部附属日光植物分園(以下、日光分園)は[1]，明治35(1902)年11月5日，栃木県下野国上都賀郡日光町佛岩に創設され，明治44(1911)年11月には，蓮花石町の旧松平伯別邸の敷地に移転し敷地及び施設の拡充を図っている[2]。創設時においては，東京帝国大学理科大学教授松村任三の主導により，園内に石を積み上げた数個の石山，清流及び小瀑布よりなるロックガーデンが整備され，高山植物の研究，教育，保護及び観覧に供したことから，近代日本の植物園における本格的なロックガーデンは，日光分園において実現したという指摘も見られる[3]。しかしながら，移転後の整備については，園内の設計を主に東京帝国大学農科大学助教授草野俊助が担当し，昭和2(1927)年10月には，田村剛設計による大正天皇行幸記念園が竣工したことが知られているものの[4]その詳細については明らかになっていない。一方，昭和23(1948)年6月発行の松村義敏による『日光植物園と高山植物』に添付されている「地圖」（図－1）にあたると，園内に3つのロックガーデン（乾性御花畑）が確認できるのである[5]。

そこで，本稿では，明治44(1911)年から昭和20(1945)年までを日光分園の拡充期と位置付けて，創設期において実現したロックガーデンの意匠や整備意図が，拡充期においてどのような展開を見せたかを明らかにしたい。研究の方法としては，拡充期を明治末期・大正期（1911-1926）と昭和初期（1926-1945）の2期に分け，東京大学所蔵の資料等を用いて，既往の研究を踏まえつつ，ロックガーデンの整備における経緯，意匠及び背景を検証していくこととする。

２．明治末期・大正期におけるロックガーデンの整備（1911-1926）

（１）日光分園の移転

東京大学文書館所蔵の「明治四十五年以降 土地關係書類 営繕課」に綴られている明治45(1912)年4月22日付けの「日光植物分園敷地補足」のための伺いには，



図－1　地圖（部分 縮尺不明）昭和23(1948)年　方位，（　）内加筆

本學理科大學附属日光植物分園ノ新敷地ハ本年度ニ於テ經營ヲ開始シ其經営方針ノ概要ハ本邦産寒地高山植物研究ノ便及實驗材料ノ供給并高山植物ノ保護ヲ計リ又理科大學ノ外農科大學ニ於ケル森林植物學ノ研究及参考資料ニ供スル等ヲ以テ目的トナシ差向キ實驗室ノ新築等ニ着手スル豫定ナリ・・・將來當分園ノ表入口ト爲シ・・・當日光山森林ノ天然状態ヲ現ハスノ目的ヲ以テ山麓濶葉樹帯，針葉樹帯，灌木帯ニ至ル樹種ヲ適宜ニ配置シ殖栽スルノ必要アルモ土地ノ面積不足ナルニ依リ別紙圖面中千八百四十八番以下九筆ノ土地増購ヲ要シ又東南方ノ位地ニ於テ千九百四番以下五筆ノ土地ハ地勢上外国産ノ山頂植物濶葉樹及草類ヲ殖栽スルノ地区ト爲スノ必要アルモ是レ亦在來ノ土地ノミニテハ面積不足ニ付増購ヲ要ス

とあり，日光分園の移転が，従来からの理科大学における高山植

* 茨城県土木部

物の研究，保護に加え，農科大学の森林植物学の研究に資するためであったことが知られる。そして，添付されている「東京帝國大學理科大學附属日光植物分園敷地増見取圖」（図－2）及び図－1を併せて検討すると，日光山森林の天然状態を現す山麓濶葉樹，針葉樹等の植栽予定地は，新たに設けられる正門付近（1848番以下9筆）であったこと，また，外国産の山頂植物等の植栽予定地（1904番以下5筆）は，主に，昭和2(1927)年に整備がなされる大正天皇行幸記念園のロックガーデンの位置であったことが明らかになる。

なお，大正2(1913)年1月24日付の朝日新聞には、「日光の高山植物 理科大學の新植物園」が掲載されており，

理想的設計　新園の設計は全園を十八區に區劃して西部の第一、二、三區にはツゲ、アスナロ類、シラベ、アヲモリ椴類又ダケ樅等の針葉樹、第四區は濶葉樹、第五區は他の針葉樹、第六區は北海道樺太針葉樹類とし又北側中央の崖には火山灰や富士岩等で岩壁を模造し之にコマ草、トーヤク龍膽、ツガ櫻、岩梅等の山頂植物を植付け中央に位する第八、第九、第十區は高山植物花壇、普通花壇及蓮華ツヽジ、第十一區は湯元附近草地第十二區は草本分科壇であるから春夏開花の季節には實に五彩燎爛の美觀を呈するであらう、其他樹木分科壇、赤沼原帯、外國針葉樹（普通）外國山頂植物、外國濶葉樹、外國草本類等と夫々分科的に植附け尚含滿ヶ淵に沿た崖際には日光に多き各種の楓類を一帯に培植して一段の風致を添へ理想的高山植物園を築造する計畫で其全部を完成するには今後數年を要する見込である。

とあり，図面が示されていないので，「北側中央の崖」や「外國山頂植物」の植付けが具体的にどこを指すのかは明らかではないが，当時，日光分園において，高山樹木の区画や高山植物花壇に加え，内外の山頂植物を植付けるロックガーデンの整備が計画されていたことが知られるのである。

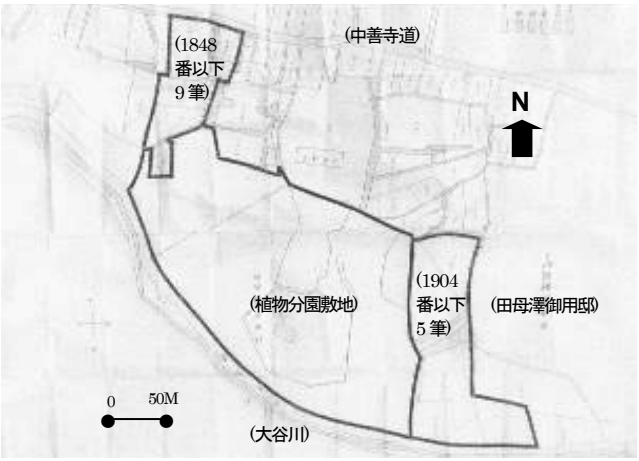
（2）築山置石

東京大学附属総合図書館所蔵の「東京帝國大學第二十七年報」（明治45(大正元)年度）には，

日光分園ニ於テハ既定ノ計畫ニ從ヒ宿舎ヲ移轉シ實驗室ノ新築ヲ完了シ園内ノ通路ヲ開通シ樹木ノ植立等實施シツヽアリ

とあることから，明治45(1912)年頃より，既定の計画に基づき，園路の整備や樹木の植樹等が進められたことがわかる。そして，東京大学文書館所蔵の「昭和二十二年三月三十一日現在 國有財産現在額調 東京帝國大学」（以下，「國有財産現在額調」）に記された「植物園分園」の施設整備の内容等をまとめたのが表－1であるが[6]，この表より，「廳舎」の移築及び「実驗室」の新築の完了が，大正2(1913)年3月31日であったこと，そして「築庭」の内，「築山置石」すなわちロックガーデンの新設が，これらに先立つ大正元(1912)年12月19日であったことが確認できるのである。移転後の整備に際しては，高山樹木の植樹と共に，ロックガーデンも早い段階で整備がなされたのである。また，「築庭」の内，「築山泉水」の新設は，大正2(1913)年12月31日及び同3(1914)年7月19日であった。

実驗室付近の状況については，大正4(1915)年6月発行の『日光山東照宮三百年祭記念誌』に，「帝國大學日光植物園」と題した写真が掲載されており[7]，同じ写真を使用した絵葉書「大學植物園」（写真－1）について，図－1も踏まえて内容を検討すると、手前に池があり、その先の西側に実驗室が、東側に2つの築山とその奥に庁舎が位置しており，築山には、置石が確認できるのである。創設時のロックガーデンは，石を積み上げた石山であったが，移転後のロックガーデンは，緩やかな斜面に石を置いた築山置石であったことは注目されよう（写真－2）。なお，東京大学文書館所蔵の「自明治四十年 至大正七年 豫算關係書」に綴られた「大正三年度文部省所管東京帝國大學歳入歳出豫算計算書各目明



図－2 日光植物分園敷地増見取圖 方位，縮尺，敷地境界線，（ ）内加筆

表－1 國有財産現在額調 昭和二十二年三月三十一日 現在

明治末期（明治42(1909)年～明治45(1912)年）					
土地 9,584坪(42.4.27)，3,718坪(45.6.13)，454坪(45.6.19) 累計 13,756坪					
工作物					
種目	名稱	數量	價格(円)	新設	取得理由
水道	水道	1	428.2	42.10.29	新設
同上	同上	1	153.6	同上	同上
大正期（大正1(1912)年～大正15(1926)年）					
土地 6坪(1.8.2)，2,359坪(3.8.20)，661坪(3.9.2)，518坪(3.10.9)，152坪(4.2.6)，2,546坪(7.7.11) 累計 19,998坪					
建物					
種目	名稱	數量(坪)	價格(円)	起工 竣工	取得理由
事務所建	廳舎	63.528	3,176.40	1.10.19 2.3.31	移築
同上	実驗室	22	2,199.00	1.10.19 2.3.31	新築
雑屋建	門衛所	4.5	1,439.50	10.5.25 10.11.10	同上
同上	浴室及び廊下	5.75	865.27	15.9.12 15.10.7	同上
工作物					
種目	名稱	數量	價格(円)	新設	取得理由
門	門	1	964.13	7.3.13	新設
水道	水道	1	20	15.10.7	同上
下水	埋下水	1	24	同上	同上
築庭	築山置石	1	439.7	1.12.19	同上
同上	築山泉水	1	445.45	2.12.31	同上
同上	同上	1	449.3	3.7.19	同上
照明装置	電燈		10	15.10.7	同上
昭和前期（昭和1(1926)年～昭和20(1945)年）					
土地 1,564.697坪(12.2.25) 累計21,562.697坪					
建物					
種目	名稱	數量(坪)	價格(円)	起工 竣工	取得理由
雑屋建	便所	1.55	299.00	2.11.17 2.12.31	寄付
同上	同上	1.55	299.00	同上	同上
同上	同上	1.55	299.00	同上	同上
同上	園丁作業所及物置	8.75	690.00	14.7.2 14.8.30	新築
工作物					
種目	名稱	數量	價格(円)	新設	取得理由
築庭	岩石園石碑水道引水	1	7,238.55	2.10.10	寄付
同上	引水及植樹	1	615.55	4.6.30	同上

＊建物の構造は木造平屋建　＊新設，起工 竣工は年月日

＊寄付は日光植物園行幸記念会によるもの

細書」には,

理科大學日光植物分園ハ前年來庭園築造ニ着手シ漸次完成セシムル必要アルニ依リ此費用四百五拾圓

とあることから，庁舎と実験室の間に配された築山置石と築山泉水は，一体の庭園として整備がなされたと見て良いであろう。

（3）設計者

昭和 15(1940)年発行の『東京帝國大學理學部植物學教室沿革』（以下,『沿革』(1940)）には、

明治四十二年六月蓮花池の土地九千五百坪を得たり。これ日光馬返の街路に當り含滿ヶ淵に臨める荒廢の所たりしが、これを開拓して園内の配置の議にあづかれるは農科大學助教授草野俊助にして、樹木調査の委嘱を受けしがその實望月直義と共にその設計にあたり、明治四十四年十一月これに移れり。

とあり，さらに,『沿革』(1940)における職員の進退に関する記述より，草野は日光分園の嘱託を明治 43(1910)年 6 月 2 日から大正 14(1925)年 7 月 15 日まで，望月は同園の雇員を明治 35(1910)年 9 月 20 日から大正 9(1920)年 3 月 10 日まで，続いて助手を同日より昭和 7(1932)年 3 月 31 日まで勤めたことが確認できる [8]。そして，昭和 9(1934)年に河野齡藏が著した『高山植物の培養』には,

ロツクガーデンは、歐洲では早くより築かれたが、我が國に於ては、近年までは多く行はれなかつた。明治年代に於いて、故五百城文哉氏のもの、次で望月直義氏によつて作られた東大の日光植物園内のもの

とあり，さらに,

日光に於ては、東大附屬植物園中にロツクガーデンが設けられ、近年まで望月直義氏によつて擔當せられたのである。

とも記されているので [9]，創設期そして拡充期の庁舎前ロックガーデンの整備においても，望月の役割は大きかったのではないかと考えられる。ただ，すでにふれたように，創設期と拡充期では，ロックガーデンの意匠に違いが見られる。そこで，当時の状況を再考すると，創設期の日光分園では，高山植物保護の観点から，培養に適したロックガーデンの構造が重視され，また，三好学や白井光太郎によるベルリン植物園等の石を積み重ねた山の紹介も図版を伴わなかったことから，ロックガーデンの整備は，おそらくはロビンソン(W. Robinson)の著作“The English flower garden and home grounds”(1901 London)に掲載された石の積み方の事例等を参考に試行錯誤の内に進められたのでのではないかと考えられるのである [10]。しかしながら，明治 40(1907)年 7 月発行の「東洋學藝雜誌」（310 号）に掲載された松村任三による「英國植物園の話」には、松村が明治 39(1906)年 5 月から同 40(1907)年 2 月まで欧米の植物園等を視察し，イギリスのキューガーデンに感銘を受けたことが記されており [11]，また，明治 40(1907)年 2 月 9 日付の「讀賣新聞」には、松村任三による「キュウ植物園を觀る」が掲載されており、

薔薇並木の附近に、高山植物園がある。七八町の間地を三四尺掘下げ其の両方に岩石を積上げて各國の高山植物を植付けたもので，中の低い道を歩み乍ら左右に植物を眺めて行くと，水がちよろゝと岩間より流れ出つるなぞ，幾何か高山に行たやうな氣を起させる。

とあることから，松村はイギリス等の植物園を視察することにより，ロックガーデンの意匠が石山だけではないこと，そして，高山の気分が味わえるような庭園としての整備も重要であることを認識し，そのことは，草野や望月にも何らかの影響を与えたのではないかと考えられるのである。草野が所属する東京帝国大学農科大学では，前述のロビンソンによる“The English flower garden and home grounds”の 1905 年版を明治 40(1907)年 2 月 28 日付けで，ヘムズリー(H. Hemsley)による“Rock and Alpine gardening” (London)

写真－1 絵葉書「大學植物園」（大正 2 年 4 月以降，同 4 年 6 月以前に撮影）

写真－2 絵葉書「大學植物園」（部分 庁舎前）

図－3 Alpine Flowers and Rock Gardens（部分）

写真－3 Waterfall in Rock Garden at Newnham Park（部分）

を明治 44(1911)年 8 月 8 日付けで，ロビンソンによる“Alpine flowers for gardens rock, wall, marsh plants, and mountain shrubs 3rd ed”(1903 London)及び マイヤー（F. Meyer）による“Rock & water gardens their making & planning with chapters on wall & heath gardening”(1910 London)を大正 2(1913)年 10 月 1 日付けで受入れており，いずれもロックガーデンの解説において，緩やかな斜面の置石（図－3）[12]や水辺の石組（写真－3）[13]にもふれていることから，おそらく草野や望月は，これらイギリスの造園書も参考にして，築山置石による庭園としてのロックガーデンの意匠を把握したのではないかと考えられるのである。

（4）大正天皇の行幸

東京大学文書館には，大正 3(1914)年 5 月 2 日付けで東京帝国大学理科大学附属植物園園長松村任三が東京帝国大学総長山川健次郎に宛てた『東京帝國大學第二十八年報』（大正二年度）の草稿が残されており，

日光分園ハ同地田母澤御用邸ト地ヲ接シタルヲ以テ昨大正二年八月十八日聖上皇后両陛下御避暑トシテ御用邸ニ行幸啓アラセラレ九月十五日東京ヘ還御アラセラレタル其間同園ハ御遊歩場

ニ充テラルヽニ尤モ適當ナルカ爲メカ殆ント毎日數回両陛下ニ於カセラレテハ同園ニ行幸啓遊ハサレ御満足啓遊タル趣ニテ御還後分園經營費中ヘトテ金三百円下賜相成分園ハ勿論植物園ノ光榮此上ナキ次第ナリ再今夏期ノ際ハ度々同地ニ行幸アラセフルヽヤニ倖承セルヲ以テ更ニ同分園ノ經營ヲ促進スルノ必要ヲ認メ本年度末ニ於テ岩園ノ築造並ニ湿地植物培養地ヲ完了セリ

とあることから，大正 2(1913)年の夏に，大正天皇が頻繁に日光分園を訪れ，下賜金 300 円を受けたこと，そして，翌年の夏も行幸が予想されることから，岩園及び湿地植物培養地の整備を年度末に完了させたことが明らかになる。岩園及び湿地植物培養地は，前述の「築山置石」及び「築山泉水」を指していると見てよいであろう。

さらに，大正 3(1914)年 7 月 29 日付けの「東京朝日新聞」には，

日光の兩陛下 高山植物の御愛觀･･･殆ど日課の如くに御内苑續きなる理科大學の日光植物苑に成らせ給ふ、植物苑は奇勝含滿ケ淵に接した三萬坪からの廣さで三百種以上の高山植物が黄、紅、紫に色とりどりに美しく咲き匂ふ様さながら繪巻物を展けた様に美しい･･･高山植物･･･に就いて親しく御説明遊ばされる

とあり，大正 3(1914)年の夏も，大正天皇は日光分園を訪れ，高山植物に親しんだことが知られるのである。ちなみに，宮内庁公文書館所蔵の「幸啓録 大正三年」に綴られている大正 3(1914)年 8 月 4 日の伺には，

日光植物分園･･･両陛下御運動アラセラレ候ニ付･･･園内ニ御乗馬道ヲ新設シ之ニ要セシ徑費見込百二十円内外且ツ園内植物ヲ御運動ノ際御持帰ニ付候是参酌ノ上前年ノ通金参百圓下賜

とあり，両陛下の行幸に対応した施設整備や高山植物の提供がなされていたことがわかる。

また，「東京帝國大學年報 大正三年度中」（草稿 大正 4(1915)年 6 月 5 日提出）に，

新タニ沼澤地ヲ經營シ湿地植物ヲ培養シ

とあり，この沼澤地は，図－1 における湿性御花畑ではないかと考えられ，東京大学文書館所蔵の「大正五年七月測定（大正八年七月現在）東京帝國大學日光植物分園」（図－4）には，沼澤地西側の流れに沿った斜面に「散岩」が見られることから，沼澤地はロックガーデンと一体的に整備がなされたと見てよいであろう。

その後の整備についても，「東京帝國大學年報 大正六年度中」（草稿 大正 7(1918)年 6 月 15 日提出）においては，

園内樹木等ノ整理ハ勿論該地附近ノ山野ヨリ間断ナク樹木山草ヲ移植シ之カ栽培ヲ為シツヽアリ

とあり，高山樹木や山草の移植が連続して進められたことがわかり，その結果，「東京帝國大學年報 大正九年度中」（草稿 大正 10(1921)年提出）においては，

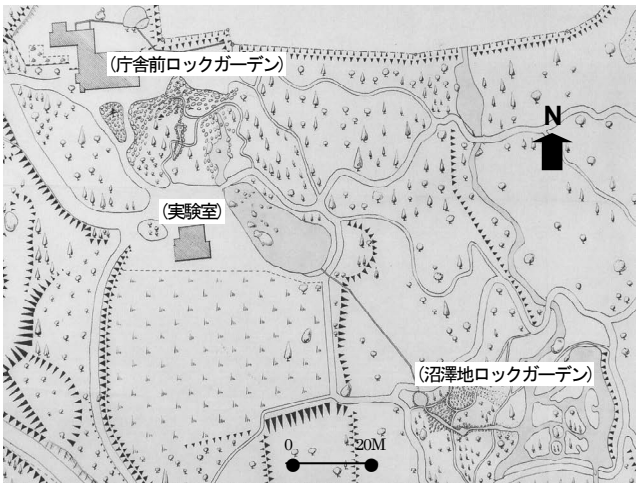
本年度九月ノ頃ヲ以テ日光植物分園ニ於テモ新タニ觀覽規則ヲ制定シ之ヲ実施セリ･･･日光植物分園ニ於テハ過去数年間他ヨリ採集移植セル植物ハ追々自然生育ノ状態ヲ呈シ来リ年遂ヒテ益々高山植物園ノ真價ヲ光輝シツヽアリ

とあり，移植した高山植物が自生のように育つようになった大正 9(1920)年 9 月，日光分園は，有料公開に移行するのである[14]。

当時の状況は，東京大学史料編纂所所蔵の絵葉書「東京帝國大學理學部 日光植物園」からも窺うことができる[15]。園内には，様々な高山樹木が配され，高山植物花壇や池周辺の石組には，高山植物の植え込みと共に植物名を記した立札を確認することができるのである（写真－4，5）。このように，ロックガーデンを含む園内の整備が順調に進んだ背景には，毎夏の行幸への対応も影響していたのではないかと考えられるのである。

3．昭和前期におけるロックガーデンの整備（1926-1945）

（1）日光植物園行幸記念会



図－4　東京帝國大學日光植物分園　方位，縮尺，（　）内加筆
大正五年七月測定（大正八年七月現在）（部分）

写真－4 植物學實驗室（部分）

写真－5 鳴蟲山ノ眺望（部分）

東京帝国大学理学部会が昭和 2(1927)年 12 月に発行した「理學部會誌」(6)には，東京帝国大学理学部長の中村清二による「大正天皇日光植物園行幸記念碑記念園の落成式に於ける辭」（以下，中村(1927)）が掲載されており，

先帝の御意に召したと拝察致しまするのは園の東側にある彼の丘上の風光でありまして、栗の老樹の下に天幕を張つて御休息所とせられ･･･之を永遠に記念したいと･･･本年二月十五日に東京帝國大學總長に(一)日光植物園の御休息所趾に記念碑を設けたきこと･･･(三)其の碑を中心として造園し高山植物園を設くること･･･を開陳して･･･東京帝國大學職員、先帝の側近に奉仕した方々及び栃木縣の有志者と此の三方面のものが集まつて行幸記念會を組織し･･･六月一日起工と同時に趣意書を公にして一般に御醵金を願ひました。･･･其の後工事を急ぎまして終に十月十一日附を以て大學に落成届を差出し

とあり[16]，東京帝国大学職員，天皇の側近及び栃木県の有志で行幸記念会を組織し，園内東側の大正天皇ゆかりの丘に記念碑を据えその周囲を造園し高山植物園を設ける計画を立て，表－1 も併せて検討すると，昭和 2(1927)年 6 月 1 日起工，同年 10 月 10 日に落成，翌日，落成届を提出したことが知られるのである。

（2）大正天皇行幸記念園

東京大学文書館所蔵の「自昭和貳年度 至昭和拾年九月 寄附関係書類 営繕課」（以下，「寄附関係書類」）には，日光分園の寄付に関する書類も綴られており，まず，昭和 2(1927)年 6 月 1 日付けの「寄附申込書」には，

日光植物分園内造園約一千坪　此工費豫定五千圓施設ノ大要左ノ如シ　記念碑石　壱基　岩石園（高山植物ヲ配植ス）　植樹（高山特有ノ常緑樹並濶葉樹其他）　水道工事（山草栽培「スプレー」用ニ供ス）

とあり，起工の段階で，造園は工費 5,000 円，1,000 坪の敷地に石の記念碑，岩石園及び高山樹木を配し，水道によるスプレーの設備も計画していたことがわかる。

そして，落成後の昭和 3(1928)年 1 月 13 日付けの伺いには，

日光植物分園内ニ大正天皇行幸記念碑及記念園別紙圖面ノ通リ施工致候處仕様概要並費額内譯左記ノ通リニ候也
仕様概要　中心ニ記念碑ヲ建テ其ノ周圍二千坪ヲ一帯ノ芝生トナシ水ヲ引キ岩石園ノ高山植物ニ灌漑シ傾斜ニ沿ヒ岩石ヲ組ミタル細流ヲ流シ池ニ入ル又園ノ風致ヲ賞スルタメニ四通八達ノ道路ヲ設ケリ･･･水道設備 四〇〇圓　記念碑 五〇〇圓　造園 五七二三圓 内譯･･･植栽･･･五十種三百五十本

とあり，また，中村(1927)に，

高山植物を栽培する爲めに築かれた岩石園、之に適當なる水分を與ふる爲めに日光街道の向側の水源から新た引いた水道によつて岩石園の中に流された渓流の面白さ、流の末を受けて水草を植える爲めに新たに掘られた池の趣等･･･又造園の材料たる石材を寂光大石の川から、芝を石橋から採集

とあることも踏まえると，落成した行幸記念園は，工費 6,623 円，2,000 坪の敷地の中央に記念碑を据え，その周囲に芝生を張り，高山樹木 350 本を植栽し，園路を設け，また，敷地の東側には岩石園を設け，高山植物の灌漑用に水道を引き，その水を受ける池も整備されたことがわかり，その概要は，落成式当日配られた絵葉書「日光植物園 大正天皇行幸記念園」（写真－6，7）からも確認することができる。ちなみに，園内北側の斜面に石を置き，その間を渓流が流れ，南側の池に注ぐ庭園としての意匠は，庁舎前に設けられたロックガーデンとほぼ同様であったと見て良いであろう。また，ロックガーデンの整備は，大正天皇が好んだ高山植物を培養するためであったが，すでに見たように，この敷地は移転当初から「地勢上外国産ノ山頂植物闊葉樹及草類ヲ殖栽スルノ地区」であったことから，ロックガーデンの築造に適していたと見ることもできよう。

なお，表－1 によると，「日光植物園行幸記念会」よる寄付は，昭和 2(1927)年 10 月 10 日の「築庭 岩石園石碑水道引水」だけではなく，同年 12 月 31 日の「便所」3 棟，そして昭和 4(1929)年 6 月 30 日の「築庭 引水及植樹」に及んでいることがわかる。昭和 4(1929)年の寄付については，「寄附関係書類」に綴られている昭和 4(1929)年 3 月 25 日付けの「献納願」に，

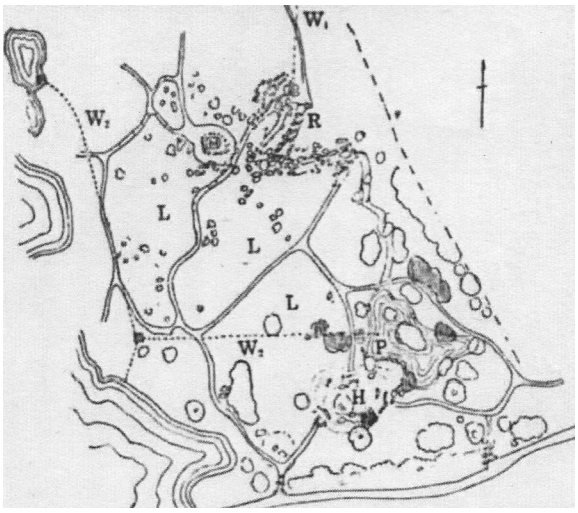
日光植物分園大正天皇行幸記念追加工事　六一五圓、五五
水道工事 三六〇圓、七五　樹木植込工事 二五四圓、八〇
記念園竣功當時ノ植樹ニシテ枯損セシモノ及ヒ外觀上必要ナル箇所ニ喬木、灌木、山草類合セテ約百五十種ヲ植栽セリ

とあり，行幸記念園南側の池の水位を保つためには，高山植物の灌漑用の水だけでは足りず，別途水道を引いたことや枯損対応も含め，新たに高山樹木，山草等約 150 種の植栽がなされたことがわかり，一連の造園は，昭和 4(1929)年 6 月 30 日に完了したと見てよいであろう。そして，その成果は，中村が昭和 12(1937)年に著した『物理學周邊』に掲載された「大正天皇行幸記念園略圖」（図－5）により確認することができる[17]。

（3）田村剛とロックガーデン

前述の中村(1927)には，

造園に關する全體の設計者は林學博士田村剛氏で同氏は造園學の泰斗であります。工事の請負者は春日時太郎氏施工者は蛭田庄二氏及び其の助手の宮寺源次郎氏であります。蛭田、宮寺兩氏の熱心なる殆ど寝食を忘れ風雨を犯して工夫を督勵せられましたので、田村博士の設計の美はしきと相待つて斯くの如き立派なものが出來上りました。



図－5　大正天皇行幸記念園略圖 縮尺不明　M 行幸記念碑　H 築山休憩所　R 記念岩石園　P 池　L 芝　W1 岩石園ノ渓流ニ導ク鐵管水道　W2 土管水道

とあり，田村剛は，春日時太郎や蛭田庄二，宮寺源次郎と共に大正天皇行幸記念園の整備に取り組んだことがわかる。田村は，大正 12(1923)年 3 月から同 13(1924)年 8 月までの欧米視察の経験を踏まえ[18]，大正 14(1925)年に『造園學概論』を著し，イギリスのパークンヘッド公園について，

その植栽は日本式等と敢て大差もないが、石組に至つては、美的形式に支配せらるゝ日本式に對して、特に自然の法則に支配せられてゐるのを見るのである。

と述べており，イギリスの石組が自然の法則に依っていることを指摘し，さらに，

イギリス人の園藝趣味と戸外生活の好愛より･･･あたりの材料が悉く實用的なものであり、･･･行届いた手入が施されてゐるために･･･英國の庭園は夫が非科學的であらうが非藝術的であらうが、･･･力强い植物の表現が溢れてゐる。さればロツク、ガーデンの様な不自然なものをも、よく美化して、何等の理屈を挿む餘地をあまさない所に、イギリス庭園の面目を察することが出來る。キューガーデンは養樹的な植物園であるが實に立派な自然式の造園と見ることが出來る。

と記しており，材料が実用的で手入れが行き届いているイギリスの造園は，力強い植物の表現があると主張するのである[19]。松村と同様，田村もキューガーデンを評価していたことは注目されよう。そして，田村が昭和 3(1928)年に著した『洋風の庭園』では，

ロツクガーデンは、特殊な高山植物を主とした岩石園であつて、高山地方の風景を寫したものであるが、それは自づから日本庭園と酷似した點があつて、よく風景園の一部に採用せられ得るものである。･･･洋風林泉の最も著しい特徴は寫實的なことであつて、･･･岩組 Rock work は急傾斜地や水邊等に設けられるが、

写真－6　大正天皇行幸記念園岩石園

写真－7　大正天皇行幸記念園岩石園ノ遠望

写真－8　ロツク・ガーデン（イギリス）

日本庭園程重要なものとはなつていない。･･･ロツク・ガーデン Rock gardenはイギリスに最も盛んであるが、･･･ロツク・ガーデンの設計に就ては、先づ特有な岩組 Rockery をしなければならぬ。･･･植物を植ゑ出すべきポケツトを造りながら、岩を積んで行くのである。所が高山植物の中には、土地に對する要求が著しく異なつたものがあるので、その一般の性質を心得なければ、この場合の岩組は不可能だといはねばならない。

とあり，イギリスのロックガーデンは日本庭園と似ているが，より写実的な風景園であること，高山植物の土地に対する要求をよく心得ないと岩組が困難であることを指摘し，口絵(写真－8）についても，岩組の写実的な点と植物の異なった要求を満たすポケットの工夫による外観上の変化が成功していると評している [20]。写真－6 と写真－8 を比較すると，高山植物の繁茂の度合いは異なるものの，写実的な岩組について一部，類似が指摘できよう。

大正天皇行幸記念園のロックガーデンは，イギリスのロックガーデンに注目していた田村が設計することにより，写実的な風景園としての意匠をより明確にしたと考えられるのである。

（4）ロックガーデンの流行

昭和 5(1930)年以降の日光分園における施設整備の状況は，表－1 によると，「園丁作業所及物置」の竣工のみであるが，「東京帝國大學一覽 昭和十三年度」には，

昭和九年度ヨリ四年間繼續事業トシテ大谷川沿岸ノ傾斜地ニ約百五十坪ノ岩石園ヲ新設ス

とあり [21]，図－1 も併せて検討すると，大谷川沿いの斜面に約 150 坪のロックガーデンが新設されたことが確認できる。新設の経緯は明らかではないが，昭和 8(1933)年 1 月発行の「博物館研究」6(1)には，

六甲高山植物園　二萬坪の高山植物園は，･･･巨岩のこゝかしこにコケモモ，シラネアフイなどの優艶な高山の花を，･･･取寄せて配し，來春から開園の運びとなつた。

とあり [22]，昭和 10(1935)年 3 月発行の「博物館研究」8(3)にも，

京都府立植物園にロツクガーデン　園内北東の三千坪にこのほどから着工してゐるが、･･･京都を中心に日本各地の山草、濕地植物類を網羅し、･･･日本一を目指しての五ケ年計畫であると

と報じられていることから [23]，この時期，他の植物園においてロックガーデンの新設が続いており，大谷川沿いのロックガーデンも，このような動向を踏まえての整備であったのではないかと考えられるのである。

4．おわりに

本稿では，拡充期の東京帝国大学理学部附属日光植物分園におけるロックガーデンの整備に着目し，その経緯，意匠及び背景を検証した。まず，明治末期・大正期においては，庁舎前に築山置石によるロックガーデンが大正元(1912)年 12 月 19 日に，築山泉水も大正 3(1914)年 7 月 19 日までに一体の庭園として新設されたこと，設計は草野俊助と共に望月直義も担当していたこと，ロックガーデンが築山置石であったことについては，明治 40(1907)年に松村任三が，イギリスのキューガーデンにおける高山の気分が味わえるような，庭園としてのロックガーデンを紹介したこともあり，イギリスの造園書に掲載されていた緩やかな斜面に石を据えた意匠が注目されるようになったのではないかと考えられること，そして，大正天皇の行幸への対応もあり，園内ではロックガーデンを含む沼澤地，高山樹木の植樹及び高山植物花壇等の整備も着実に進んだことを指摘した。次に，昭和初期においては，園内東側の丘に，記念碑，芝生，高山樹木及びロックガーデンよりなる大正天皇行幸記念園が，昭和 2(1927)年 10 月 10 日に落成，追加工事も昭和 4(1929)年 6 月 30 日に完了したこと，ロックガーデンの斜面の置石や水辺の石組は，庁舎前のロックガーデンとの類似が見られるが，設計を，イギリスのロックガーデンに注目していた田村剛が担当したことから，写実的な庭園としての意匠をより明確にしたと見なせることを併せて指摘した。なお，昭和 9 年度から 4 ヵ年継続事業で，大谷川沿いの斜面に約 150 坪のロックガーデンが新設されているが，これは，当時，他の植物園で，大規模なロックガーデンの整備が進められていたことが影響しているのではないかと推察される。

日光分園のロックガーデンは，創設期においては，高山植物の培養を意図した石山であったが，拡張期においては，イギリスのロックガーデンの影響もあり，庭園としての意匠も重視され，築山，丘そして川沿い等の斜面に石が配され，園内に高山の気分を生み出したのである。

謝辞:本研究を進めるに当たり，下記の機関等の方々より，多大なご支援を賜りました。ここに感謝の意を表します。東京大学（文書館，附属図書館，史料編纂所，施設部，附属植物園，同日光分園），宮内庁公文書館，栃木県立博物館，同図書館，日光市立図書館

補注及び引用文献

1）「官報」の表記では「東京帝國大學理學部附屬植物園日光分園」であるが，例えば正門の「絵葉書」にも「東京帝國大學理學部附屬日光植物分園」とあるので，本稿もこれに依った。なお，東京帝国大学理科大学が東京帝国大学理学部となるのは，大正 8(1919)年 2 月 6 日からであるが，本稿では，明治 44(1911)年から大正 8(1919)年までの期間も考察の対象に含めるものとする。

2）日光市史編さん委員会(1979)：日光市史 下巻：日光市,340-356
3）西村公宏(2015)：創設期の東京帝国大学附属植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について:ランドスケープ研究 78(5),449-454
4）久保田秀夫(1969)：東大植物園日光分園：遺伝 23(11),70-74
5）松村義敏(1948)：日光植物園と高山植物：東亜植物學會,添付図　栃木県立博物館所蔵
6）ほぼ同内容の「國有財産現在額調 昭和二年三月三十一日現在」も参考にした。
7）赤堀又次郎 編 (1915)：日光山東照宮三百年祭記念誌：やまと新聞宇都宮支局，口絵（日光名所其七）
8）小倉謙 編 (1940)：東京帝國大學理學部植物學教室沿革：東京帝國大學理學部植物學教室,162-163,174,188,263-264,277,289
9）河野徹(1934)：高山植物の培養：朋文堂，73,4
10）西村公宏(2015)：前掲書
11）松村任三(1907)：英國植物園の話：東洋學藝雜誌（310）,236-247
12）Robinson, William(1905)：The English flower garden and home grounds：London John Murray,140
13）Meyer, Frederick W(1910)　：Rock & water gardens their making & planning with chapters on wall & heath gardening：London Country Life,108
14）「東京帝國大學一覧 従大正九年 至大正十年」によると，観覧は，5 月 1 日から 11 月 30 日までで，観覧券は 1 枚 20 銭であった。
東京帝國大學(1921)：東京帝國大學一覧 従大正九年 至大正十年：同學,357-358
15）絵葉書の袋に「史料編纂掛」の印有り。なお，絵葉書は 6 枚よりなり，大正 7(1918)年 3 月 13 日新設の正門が含まれており，かつ，昭和 2(1927)年 10 月 10 日新設の大正天皇行幸記念園が含まれていないことから，使用されている写真は，大正後期の園内を撮影したものと考えられる。
16）中村清二(1927)：大正天皇日光植物園行幸記念碑記念園の落成式に於ける辭：理學部會誌(6),1-6
17）中村清二(1938)：物理學周邊,昭和二年十月　大正天皇日光植物園行幸記念碑落成式：河出書房,199
18）西村公宏(2011)：田村剛の庭園観－実用主義の庭園から現代庭園へ：住宅建築文献集成・第 14 巻 解説：柏書房,889
19）田村剛(1925)：造園學概論：成美堂,44-45
20）田村剛(1928)：洋風の庭園：雄山閣,口絵,56-67
21）東京帝國大學(1938)：東京帝國大學一覧 昭和十三年度：同學,250
22）無記名(1933)：六甲高山植物園：博物館研究 6(1),6
23）無記名(1935)：京都府立植物園にロツクガーデン：博物館研究 8(3),13